第一章　序論

1-1　本研究の背景

1-1-1　子どもと外遊び

近年、子どもの遊びが大きく変化していると指摘されている。仙田によると子どもは街全体を遊び空間としており、その遊び空間を、図 1-1 のように自然スペース、オープンスペース、道スペース、アナーキースペース、アジトスペース、遊具スペースの六つのスペースに分類した [1)]。こうした六つのスペースの空間量（面積と同義）は遊具スペースを除き、減少傾向にある [2)]。遊具スペースだけは基幹公園などの整備により空間量が増加している。

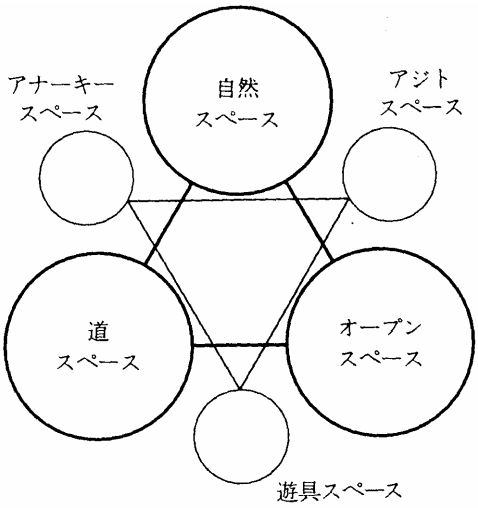

図 1-1　遊び空間の六つのスペース

しかし、「遊び環境としての施設という目的的かつ限定的な場所だけで、子どもを抱え込もうとすることの現実的な難しさが見えてくる。」[3)]という指摘がある。つまり、公園などの整備だけで、子どもの遊び環境を確保することは難しいということである。

では、公園以外の遊び場所はどこであろうか。山や川、空き地など様々な場所に立ち入り禁止の看板が増え、子どもが作った秘密基地を見かけることも少なくなった [4)]。その代わり、テレビゲームやカードゲームの流行のため室内遊びが増え、友達の家などが主な遊び場所となっていることが考えられる。

子どもにとっては、公園や空き地などだけでなく、街全体が面的な拡がりを持った遊び場であることが重要である。山や空き地などの自然的な空間だけでなく、お店やコンビニ・スーパーマーケットなどの空間、友達の家に行くまでの間の道路でさえ、小さな遊び場になる。そのように、街全体が子どもにとって大きな遊び場であることが大切である。それを通して街の環境にも目を向け、関心を喚起することにもつながる。

1-1-2　道路における危険

街全体で遊ぶ場合に重要な要素は道路である。道路とは歩道も車道も含めた道のことを指す。どこへ行くにもこの道路を通らなくてはならない。しかし、道路には大きく二つの危険が存在する。交通事故の危険と犯罪に巻き込まれる危険である。

それらの危険を回避するために学校・地域において様々な取り組みが行われている。登下校時における集団登校、「子ども 110 番の家」（図 1-2）の設置 [5)]などである。これらの取り組み

図 1-2　子ども 110 番の家看板

は学校や地域などによる積極的な取り組みである。その中では、子どもは危険な状況にならないように情報を与えられる存在であり、そのような状況から守られる存在である。

そのため、子どもが自ら危険に気付き、把握し、予測し、安全な行動を取るという内発的な危険性認識は育たない。子どもが内発的な危険性認識を育てることができるような機会も必要である。

また、道路整備においては子どもの視点で道路が作られることは少なく、主に車の視点、大人の視点からの道路整備となっている。それが原因で子どもが危険にさらされていることが考えられる。そこで、子どもにとって危険な道とはどういう道であるか、子ども自身が危険をどのように感じているかを把握することも必要である。

1-1-3 外遊び体験と危険性認識

本研究ではこれらの現状を踏まえて、子ども自身が危険をどのように認識しているか、そして子どもの普段の生活での体験がどれだけ危険性認識に影響を与えるかについて焦点を当てる。

子どもにとって街の中での重要な体験は、通学行動における体験と自宅の外で遊ぶ体験である。特に子どもにとって主体的な行動である、外遊び体験が危険性認識に影響しているならば、子ども自身の気付きによって得られる、内発的な危険性認識を外遊び体験を通して培っているのではないかと考えられる。そのため、特に外遊び体験がどれだけ危険性認識に影響を与えるかという点を追及する。

なお、危険については交通事故の危険のみを取り上げる。交通事故についてはよく事故が起こる場所やヒヤリとする場所で事故が起きる可能性が高く、比較的危険を予測しやすい。しかし、犯罪は以前にある場所で犯罪が起きたからそこが危ないとは言い切れない。どこでどのような事件が起こるか予測しづらい。つまり、犯罪については体験から予測が不可能な場合が多いからである。

1-1-4 既往研究

子どもと都市の遊び環境に関する既往研究では、仙田[2)]や三輪[6)]の研究がある。都市の遊び場の中でも公園に着目した神田[7)]や、遊び場の季節変化に着目した高橋[8)]の研究がある。これらは、子ども遊び空間、遊び時間、遊び方法、遊び仲間などを取り扱った研究である。

空間認識に関する既往研究では、小学校における子どもの行動と空間に着目した柳澤[9)]の研究や、記憶の中にある都市のイメージを心象風景として扱った松本[10)]の研究、遊びの体験と空間イメージの特性を捉えた石井[11)]の研究がある。これらは、子どもの特定の空間における体験とその空間における認識を取り扱った研究である。

街の中での行動と地域環境に関して取り上げた既往研究では、子どもたちの参加とまちづくりを扱った倉原[12)]の研究、散策行動に着目した和田[13)]の研究、街歩きを取り上げた小笠原[14)]の研究がある。これらは、街の中での行動を通して街をどのように捉えているかという認識を取り扱った研究である。

外遊び体験などの街の中での体験と、危険性認識という特定の認識の関係について取り上げた研究は見られない。

1-2 本研究の目的と意義

1-2-1 本研究の目的

本研究の目的を以下に示す。

① 外遊び体験や通学行動が子どもの事故に関する危険性認識にどのような影響を与えているかを探ること。

② 子どもの事故に関する危険性認識から道路環境の評価を行い、子どもの視点から見た安全な道路環境とはどういうものかを探ること。

1-2-2 本研究の意義

また、本研究の意義を以下に示す。

① 外遊びや通学などの体験が子どもの危険性認識に与える影響について言及できること。

② 子どもの危険性認識を知ることで、教育現場などの今後の安全教育に役立つこと。

③ 子どもの道路に対する認識を知ることで、今後のまちづくりや道路計画等に子どもの評価を活かしていくことができること。

1-3 本研究の構成

本研究は、子どもの危険性認識を明らかにするとともに、外遊び体験や通学行動との関係を明らかにしようとするものである。

本論文は七つの章から構成されている。各章の内容は以下の通りである。

第一章 ： 本研究の背景、目的と意義について述べる。

第二章 ： 本研究で行ったカメラ調査やアンケート調査など、調査の概要について述べる。また、調査対象についてまとめる。

第三章 ： 本研究で用いる数量化Ⅲ類やクラスター分析など、分析方法について述べる。

第四章 ： 本研究で行った調査の単純集計など、調査結果について述べる。

第五章 ： 第四章の結果から数量化や類型化を行い、数量化や類型化による分析結果を述べる。

第六章 ： 第四章や第五章の結果を用いてクロス集計を行い、遊び体験や通学行動と認識との関係についての分析結果を述べる。

第七章 ： 本研究の結論として、子どもの危険性認識と好きな場所の認識について述べたうえで、外遊び体験の必要性について述べる。

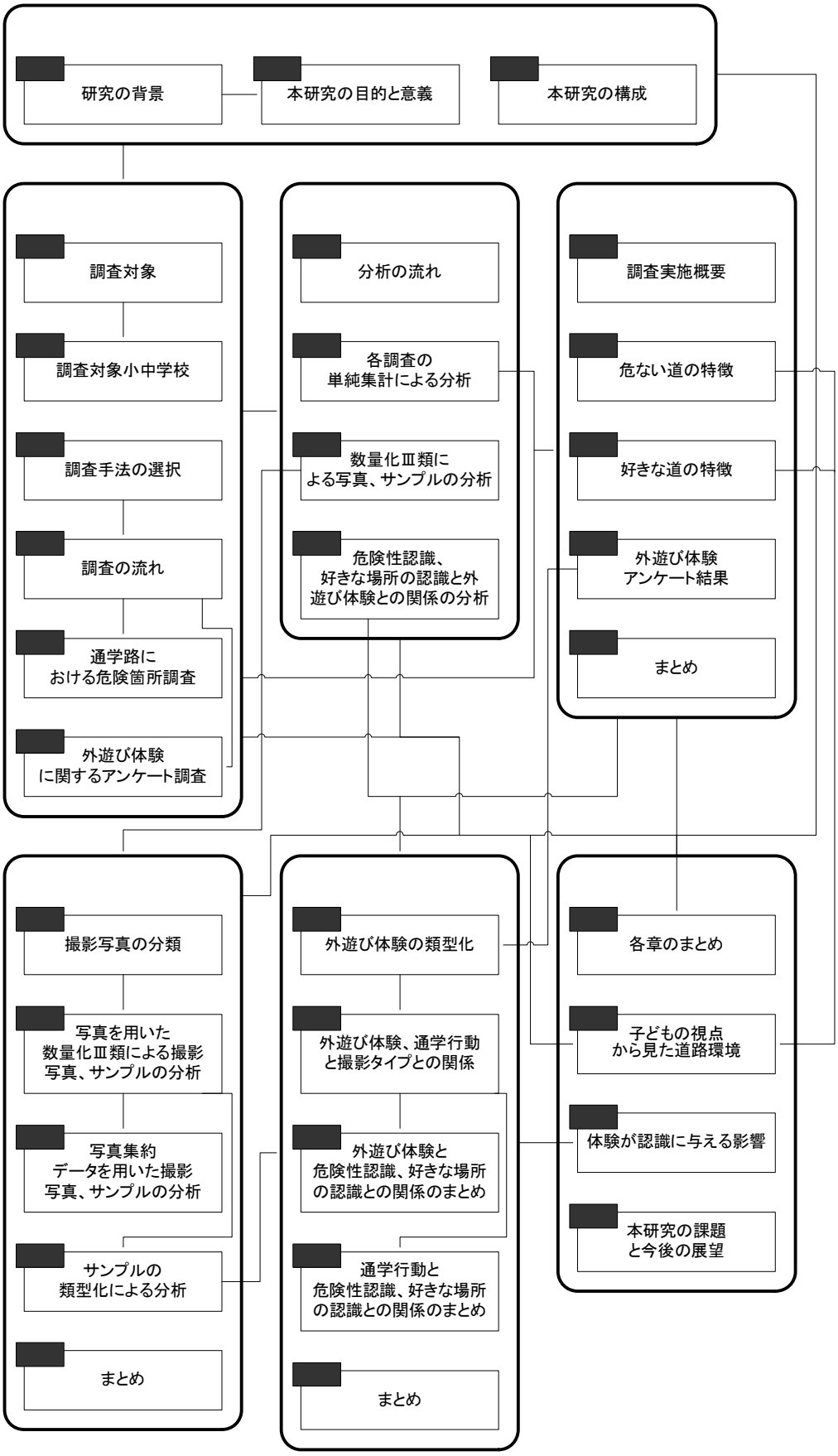
研究の背景
本研究の目的と意義
本研究の構成
調査対象
調査対象小中学校
調査手法の選択
調査の流れ
通学路に
おける危険箇所調査
外遊び体験
に関するアンケート調査
分析の流れ
各調査の
単純集計による分析
数量化Ⅲ類に
よる写真、サンプルの分析
危険性認識、
好きな場所の認識と外
遊び体験との関係の分析
調査実施概要
危ない道の特徴
好きな道の特徴
外遊び体験
アンケート結果
まとめ
撮影写真の分類
写真を用いた
数量化Ⅲ類による撮影
写真、サンプルの分析
写真集約
データを用いた撮影
写真、サンプルの分析
サンプルの
類型化による分析
まとめ
外遊び体験の類型化
外遊び体験、通学行動
と撮影タイプとの関係
外遊び体験と
危険性認識、好きな場所
の認識との関係のまとめ
通学行動と
危険性認識、好きな場所
の認識との関係のまとめ
まとめ
各章のまとめ
子どもの視点
から見た道路環境
体験が認識に与える影響
本研究の課題
と今後の展望

図 1-3 本研究の構成

参考文献及び補注

---

1) 仙田満:子どもとあそび−環境建築家の眼−,岩波書店,p19(1992)

2) 仙田満,岡田英紀:こどものあそび環境の構造的変化に関する研究−横浜・山形における経年比較調査による−,第 28 回日本都市計画学会学術論文集,pp763-768(1993)

3) 水月昭道,南博文:子どもの遊び環境研究の動向と展望,九州大学大学院人間環境学研究院紀要,第 4 号,pp25-36(2003)

4) 寺本潔,大西宏治:子どもの初航海−遊び空間と探検行動の地理学,古今書院,pp4-7(2004)

5) 彦根市教育委員会青少年課:地域ぐるみで子どもを守る「子ども１１０番の家」設置 <http://edu.city.hikone.shiga.jp/seisyounen/110/110.html>,2004/01/20

6) 三輪律江,藤岡泰寛,他:活動相手別にみた平日および土曜日の子どもの活動空間に関する研究 −横浜市保土ヶ谷区の既成市街地における子どもの活動環境調査より−,日本都市計画学会学術論文集,38(3),pp127-132(2003)

7) 神田徳蔵:児童公園等戸外遊び場の利用時間に関する考察,日本建築学会計画系論文集,499,pp49-56(1997)

8) 土屋哲,高橋白寿,他:積雪地域における子供の遊びについて 新潟市での調査と解析,日本建築学会計画系論文報告集,418,pp71-81(1990)

9) 柳澤要:小学校オープンスペースにおける児童の行動領域形成について 児童の行動場面から見た空間解析に関する研究 その 1,日本建築学会計画系論文報告集,424,pp31-42(1991)

10) 建部謙治,松本直司,他:生活空間における心象風景と地区特性との関連性 −子どもの心象風景に関する研究 その 1−,日本建築学会計画系論文集,565,pp217-223(2003)

11) 石井史彦,畔柳昭雄:河川空間に対する児童の活動特性とイメージ特性に関する研究 〜三重県宮川流域を対象とした児童の河川空間に対する空間認識に関する研究 その 2〜, 日本建築学会計画系論文集,526,pp59-65(1999)

12) 倉原宗孝:「まち遊び行動」を活用した居住環境整備計画手法に関する研究,熊本大学学位論文(1992)

13) 和田章仁:視知覚による散策空間の魅力に関する要因分析 −金沢の散策空間を事例として−,日本建築学会計画系論文集,565,pp225-231(2003)

14) 小笠原伸,藪野健:都市空間の読解・記述に関する研究 その 1 「街歩き」による都市空間読解・記述の可能性,日本建築学会大会学術講演梗概集 建築歴史意匠,F-2,pp615-616(1998)